

「神戸大学医学部保健学科創基70周年記念誌」刊行のご挨拶



安田 尚史

神戸大学大学院保健学研究科長

新しく令和の時代を迎えた記念すべき年に、神戸大学医学部保健学科創基70周年を迎えることを大変喜ばしく思っております。7月9日には、多数の皆様のご出席を仰ぎ、保健学科創基70周年記念式典および祝賀会を盛大に挙行できましたことは、ひとえに保健学科、保健学研究科をご支援いただいております皆様方のお蔭であり、保健学研究科教職員一同にとりまして大変光栄なことと思っている次第であります。

さて、この記念すべき神戸大学医学部保健学科創基70周年に際し、70年の歩みをつづった「保健学科創基70周年記念誌」を刊行する運びとなりました。

振り返りますと、神戸大学医学部保健学科は昭和24年（1949年）に設置された兵庫県立医科大学附属高等看護学院を前身とし、神戸大学医療技術短期大学部を経て、平成6年（1994年）に神戸大学医学部保健学科となり、看護学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学の4専攻を有する学科として発展して参りました。また、大学院は、平成11年（1999年）に神戸大学大学院医学系研究科に保健学専攻の修士課程を設置し、博士課程設置を経て、平成20年（2008年）に保健学研究科という新しい部局として独立致しました。さらに保健師コース、助産師コースを新設して大学院化し、平成30年（2018年）には地域保健学領域と国際保健学領域をパブリックヘルス領域として統合し、看護学、病態解析学、リハビリテーション科学領域との4領域に集約して、多彩な人材の獲得と育成に努めております。

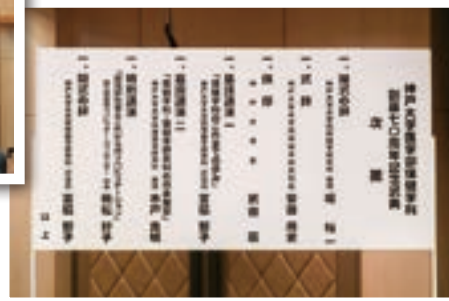
卒業生はこれまでに約8,000名を数え、医療専門職として医療の第一線で、また、教員や研究者として各分野の指導的立場で活躍しております。現在の少子・超高齢社会において、多職種協働の必要性が高まる中、医療専門職の役割の重要性はますます増加しております。保健学科、保健学研究科では「人間性」豊かな、グローバルに活躍できる医療専門職の育成に取り組んで参りましたが、科学の進歩が著しい中、人々の健康寿命延伸のため、多職種協働の精神を通じて幅広い分野を統括できる教育研究の指導的人材の養成も重要と考えております。

2015年に掲げられた「神戸大学ビジョン」いわゆる「武田ビジョン」では、「先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学」を目指し、文理融合で、社会と協働して社会実装を推進することを謳っております。保健学研究科では、その特徴である文理融合、多職種協働の精神を活かし、「アジア健康科学フロンティアセンター」を設置し、アジア諸国を対象に、子供から高齢者までを包括した、個人のライフステージに合わせた種々の健康上の問題解決を目標に、次世代グローバルリーダーの育成に取り組んでおります。さらに、オール神戸大学体制で「認知症予防プロジェクト」を立ち上げ、神戸大学が「認知症予防の先進大学」となるべく、先導的研究の社会実装への取り組みを始めました。

昨今の急速なグローバル化を背景に、大学改革、機能強化等の変革により大変厳しい部局運営をせまられる中、国内外での保健学科、保健学研究科のプレゼンスを高めるため、教員一丸となって微力ながらも学問と神戸大学の発展に貢献したいと考えております。新しい令和の時代を迎え、保健学科創基70周年に際し、次なる10年が輝かしい未来となるよう、教職員一同は一層の努力を傾注する覚悟であります。引き続き皆様方のご指導とご支援を切望するものであります。

最後に、本記念誌刊行に際してご尽力いただきました教職員の皆様に心より御礼申し上げ、本記念誌刊行のご挨拶とさせていただきます。

記念式典・祝賀会





神戸大学医学部保健学科創基70周年記念式典

令和1年7月9日
百年記念館 六甲ホール



武田 廣

神戸大学長

本日はお忙しい中、多くの関係者の皆様に御臨席賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

神戸大学医学部保健学科は、前身である兵庫県立医科大学附属高等看護学院の開校から数えまして、今年で70周年を迎えました。こうして本日記念式典をとり行うことができましたのも、ひとえに御臨席の関係各位の御支援と御努力のたまものと存じます。

保健学科、保健学研究科は、今や学部、大学院の規模としても、また学生の資質や教員の教育研究レベルからも、我が国の保健学専攻を持つ大学の中でトップレベルにあります。きょうこのように保健学科、保健学研究科が発展し、多方面からの信頼を築き上げてこられましたのも、70年前の開校から高邁な理想を掲げて、1歩ずつ着実に前進してきた教職員の努力と現在までに医療界、学界、産業界で活躍されてきた8,000名近くの卒業生の皆様のおかげと心より感謝申し上げます。

神戸大学は1902年に創立し、間もなく120周年を迎えます。開放的で国際性に富む固有の文化のもと、理系分野、社会科学分野双方に強みを生かす学理と実際の調和の伝統を発展させ、連携、融合の力を最大限に発揮することを神戸大学ビジョンとして掲げ、全学を挙げてその実現に向け邁進しています。

一方で、近年特に2004年の法人化以降、国立大学を取り巻く社会環境は極めて厳しい状況にあります。現在も大学の機能強化、グローバル化対応、ガバナンス強化など喫緊の課題が山積しております。この荒波を乗り切って、新たな希望に向かって進むために、一昨年度には生き残りをかけた今後10年間の具体的戦略、「世界に伍して戦う神戸大学の挑戦」を取りまとめました。研究、教育、国際、財務戦略として神戸大学の目指すべき姿を明示しました。

研究戦略としまして、「世界の研究・新産業をリード」、「知の創出と集積」、「新価値を社会と共創」、この3つを軸にオール神戸大学で調和し、未来社会へ挑戦し、超スマート社会の核となる学理と実務が調和した卓越研究大学を目指します。

教育戦略では、「グローバル化」、「文理融合」、「高度専門職教育」、「実践教育」の4つを軸に先端研究の臨場感の中での専門教育を行い、未来社会を牽引するイノベーション創出型リーダーを育成します。

国際戦略としまして、本学が世界をつなぐグローバル・ハブ・キャンパスとしての機能を強化し、世界各国の優秀な人材と先進的な情報を集約するグローバルユニバーシティ構想を実現してまいります。その中で医学部保健学科では、高度な専門知識、技能を身につけた地球規模で活躍する高度な保健学専門職の育成を掲げ、先端研究並びに臨場感を伴った最前線の臨床教育を推進しています。

大学院保健学研究科では、文理融合によるオール神戸大学体制での「認知症予防プロジェクト」を立ち上げるなど、先導的研究成果の社会実装への取り組みを進めています。

ここに御参集の皆様におかれましては、本日の式典を一つの契機として、保健学科、保健学研究科のみならず、私たち神戸大学の発展のため、教職員にはますますの努力を、御来賓の皆様には一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。私の挨拶にかえさせていただきます。本日は御参加ありがとうございました。

保健学研究科の思い出



石川 雄一

元神戸大学医学部保健学科長
元神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻長
元神戸大学大学院保健学研究科長
神戸大学名誉教授
元加古川市民病院院長
地方独立行政法人加古川中央市民病院機構 加古川中央市民病院 医療監

1949年(昭和24年)4月に兵庫県立医科大学附属高等看護学院が、当時の神戸医科大学の一角に設置されて丁度70年を迎えたことは誠におめでたいことであり、永年関わってきた職員、教員の皆さまの愛情と努力の結果だと大変うれしく思います。

記念誌編集委員会からいただいたテーマは「保健学研究科の思い出」ですので、個人的な思い出を中心に書きたいと思います。

私が正式に本学に関わったのは、1994年(平成6年)4月からです。当時は神戸大学医療技術短期大学部で、前任の上羽康之先生(部長)と部長を引き継いだ前田和美先生からお誘いを受け応募し幸いにも採用されました。既に保健学科に改組されることほぼ決まっていたのですが、私自身まだ「保健学」が何かを全く理解していませんでした。同年8月に文部省の設置審で正式に決定され、当時は予算的な余裕もあったので、10月から神戸大学医学部保健学科となり翌年の4月からの学生募集の準備に取りかかることが出来ました。英文名称を、Health ScienceにするかHealth Sciencesと複数にするかなどの細かい議論で盛り上がったこともありました。

翌年1995年(平成7年)1月の大学入試センター試験も無事終了し、やれやれと眠りについた翌朝1月17日に阪神淡路大震災が発生致しました。壊滅的被害を受けた神戸に、保健学科1期生の応募があるのだろうかと教職員は大変心配いたしました。大阪大学と岡山大学のご協力で無事入試は終わり、定員160名の1期生を迎えることが出来た時は大変うれしく思いました。

その後は既定の目標である大学院設置に向けて、前田和美先生、石川齊先生、三木明德先生を中心にして神戸大学全学の支援を受け邁進していきました。1998年(平成10年)には新校舎(E、F棟)が竣工し、1999年(平成11年)には神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻(修士課程)が設置され、2001年(平成13年)には大学院医学系研究科保健学専攻(博士課程)が設置されようやく完成となり教職員一同大変うれしく思ったことを覚えています。

しかし時代の流れは速くその間国立大学の法人化の構想が提示され、大学同士の統合も推進されるようになり、2004年(平成16年)には神戸大学も神戸商船大学と統合し、国立大学法人神戸大学となり、大学内にも改革が求められるようになってきました。

我が国の健康・保健の分野でも、少子高齢、疾患の多様化・パラダイムシフト、保健医療の場の変化など多くの課題を抱えるようになり、今までの医療の体制では対応が困難になるとともに新しい時代に即した人材育成が求められるようになってきました。例えば、我々が経験した大震災などの自然災害時には医学・医療分野を超えて工学部や法学部など他分野・多職種の専門家が連携・協働しなければならないことを痛感しました。保健学科でも2002年(平成14年)から保健学科長に就任した三木明德先生を中心に、新しい学部として「保健学部」を設置し時代の要請に応えようとしたのですが、神戸大学内では賛同を得られたものの文部科学省としては新しい学部の設置は認めないという方針があり、認められませんでした。そのため次善の策として「保健学研究科設置」を立案し、従来の看護学、病態解析学、リハビリテーション学領域に加えて、地

域保健学と医療の国際化に対応する国際保健学を立て、医療専門職者だけでなく福祉、行政分野とも融合していく分野を立ち上げる構想を練り、医学部のみならず神戸大学が丸となって保健学研究科設置を目指しました。私は2007年(平成19年)より保健学科長として三木明德先生の方針を引き継ぎ文科省とのいろいろなやり取り、指導の下に2008年(平成20年)4月にはようやく設置の運びになりました。文科省も人事異動で担当の課長や課長補佐の交代などもあり、設置の理念などを最初から説明しなければならぬなどなかなか大変なこともありましたが、大学本部のご指導もあり無事設置することができた時は心から本当にうれしく思う一方新しい組織を作ることの難しさを味わうことも出来ました。

大学法人化に伴い研究費などは競争的資金を獲得することが要求されることになってきました。阪神淡路大震災後保健学とは何かを考え、多職種協働実践の重要性を痛切に感じていた中、2007年(平成19年)に保健学科長になった時それまで行われていた多職種協働教育を新たに正課とする新しい教育プログラムを田村由美教授を中心に立案し、大学本部の協力も得て平成19年度特色ある大学教育支援プログラム:「協働の知を創造する体系的IPW教育の展開」を文科省に提出し見事採択されました。教育分野での競争的資金の採択は神戸大学では初めてであり、当時の野上智行学長は教育畑出身でもあり文科省のプレゼンテーションにも参加し採択後も大学が支援することを約束して下さるなど大変よい評価をしていただきました。医学科、保健学科、神戸薬大の学生がともに学ぶという斬新なプログラムは現在も継続され、私も現在もその講義の一部を担当させていただいております。10代を中心とする若い世代と直接接することは私にとっても非常に貴重であります。

その後も今度は大学院教育改革支援プログラム:「アジアにおける双方向型保健学教育の実践」が平成20年度採択となり保健学研究科の発足に花を添えただけでなく、アジア諸国に適合した総合保健学を創造し、高度保健専門職者や研究者の養成に寄与することが可能となり、2016年(平成28年)に設置された現在の「アジア健康科学フロンティアセンター」に繋がっていることは人材養成・研究の継続性・学内他研究科との文理融合実現などが可能となり大変うれしく思っております。

私は保健学研究科長を3年で辞し、2010年(平成22年)から医学部の命を受け、加古川市民病院と神鋼加古川病院の再編・統合のため加古川市民病院の院長に就任しました。地方独立行政法人という法人化をしたわけですが、大学の法人化を経験しそのメリットも十分理解しておりましたので迷うことなく実行出来、統合後は加古川中央市民病院として地域医療を支える病院を完成することが出来たのも保健学科、保健学研究科の設置に関わった貴重な経験のおかげだと感謝しております。

2019年(令和元年)7月9日には、保健学科創基70周年記念式典が神戸大学百年記念館で多数の方が列席するなか行われました。今後も保健学科がますます発展することを祈念して私の思い出と致します。

保健学研究科の思い出



塩沢 俊一

元神戸大学医学部保健学科長
元神戸大学大学院保健学研究科長
神戸大学名誉教授
九州大学元教授
株式会社膠原病研究所（文部科学省科学研究費助成事業指定研究機関）

私は平成22年から23年にかけて保健学研究科長を勤めました。その後、九州大学教授に転任し、九州大学病院共同研究部門リウマチ膠原病内科学教室にて研究を継続し、今も保健学科時代の教え子と共に膠原病研究所で研究を継続しています。

保健学研究科時代には良き同僚、教え子に恵まれ、主に教えた検査科学の学生、わが教室のスタッフや教室を選んできた卒業研究の学生たち、大学院修士・博士課程の学生たちにはとくに励まされて、前向きな時間を共にすることが出来たことを、とても感謝しています。私の研究の重要な部分は神戸大学保健学研究科でなされ、九州大学で発展し、その後完成したと思います。すなわち、私は保健学科の教え子たちに随分助けられました。神戸大学での師友との知的な交流は私にはとても大切でしたが、このことは大学のよいところであると思います。

さてここでは、当時、研究科長として目指した方向性(抱負)について述べてみたいと思います。大学は学術の府であり、それ以外の何物でもありません。大学は教育、研究を使命としますが、その教育も、研究と同様、高い学術的視点に立ってなされるべきものです。医学部の場合は、医学科も保健学科も、教育、研究に診療が加わり、教育、研究、診療が3本柱です。若い頃私は、あまりに忙しいので、医学部でこの3つを並行するのはとても無理、と考えました。しかし、年を経るに従い、大学が

大学である限り、大学は高いレベルの学術研究によって支えられねばならないということが分かるようになりました。何故なら、とくに医学部の場合、前に患者がおられるからです。正しく治療するためには、今解決できない問題を解決すべき限りない努力が必要です。その姿勢は、患者を前にしても(診療)、研究室でも(研究)、教えていても(教育)同じであるべきです。

この目的のためには、教員の選考も厳正であるべきで、創出した研究成果の漏洩を防ぐため大学構内に近所の誰彼となく、安易に出入りしてはいけないのであり、構成員の研究は十分批判的に評価され、慣れ合いでなく、批判を通じて反省、改善を重ね、互いに高みを目指す覚悟が必要です。

当時、まだ若いと感じられた先生方が教授、准教授として活躍されているご様子を頼もしく拝見し、保健学研究科をさらに発展させていただけるものと固く信じています。その発展とは、必ずしも偉大な賞の受賞や顕職への就任でなく、卒業生たち一人ひとりが現場で医学を必要とする人達を真に支え励まし喜んでいただける医療を提供できるまっとうな職業人ないし研究者になることにあると思います。

神戸大学保健学研究科とその構成員である教員、職員、そして学生諸君のご活躍とさらなるご発展をお祈りしています。



高田 哲

元神戸大学医学部保健学科長
元神戸大学大学院保健学研究科長
神戸大学名誉教授
神戸市総合療育センター 診療所長

神戸大学には、平成15年から地域連携推進室が置かれ、地域の活性化に貢献してきた。地域連携推進室の中核としてその活動を支えているのが、農学研究科、人文学研究科と保健学研究科に設置された3つの地域連携センターである。

平成15年頃、大学の地域貢献がしきりと議論されるようになった。神戸大学の理事をされていた文学部の鈴木教授から、「至急に会いたい」という連絡をいただいた。文学部に出かけていくと、同じく理事をされていた農学部の堀尾教授、文学部の奥村助教授が集まっていた。「神戸大学にも地域貢献の拠点となる部門を作ろうと思う。予算化に向け一緒に文科省への提案書を出そう。」ということであった。既に、農学部は発祥の地である篠山に拠点をもち様々な活動をしていた。また、文学部では、小野市において博物館と一緒に地域歴史遺産の保存に取り組んでいた。私に連絡があったのは、神戸市から委託研究費をもらって、極低出生体重児の子育て支援教室、養護学校における医療的ケアの取組をしているからとのことであった。鈴木教授の「違う分野の教員が違った場所で行っている全く違った活動を結びつけることに新規性と意義がある」との言葉で提案づくりが始まった。何回か集まるうちに「やはり3つのセンターが共通で行っている事業も必要だろう」という意見や、「障害のある子どもの農業体験はどうだろう、心理的なアプローチも必要かもしれない」などの意見が飛び出し、西区にある農業施設を一緒に訪れたこともあった。構想をまとめ上げて神戸大学の提案として文科省に提出しヒアリングまでは進んだが、残念ながら予算獲得には至らなかった。「予算はなくても文学部、農学部、保健学科に地域連携センターを作ろうじゃないか。神戸大学本部に地域連携推進室を立ち上げるから、自治体との連携実績を作ってほしい」と鈴木教授から新たな要望が寄せられた。地域連携推進室及び3連

携センターが平成15年～16年に設置されたが、予算もなかった。平成17年度からは、教育活性基金として事務補佐員の経費と若干の事業費が配分されるようになった。私自身も厚生労働省科学研究「保健師・保育士による発達障害児への早期発見・対応システムの開発」がこの年に採択された。その補助金を基に神戸市に「モデル事業を作らないか」と提案すると、「予算が神戸大学側からなら協力する」と返事をもらっていた。堀尾教授から、「発達科学部の【子育て支援センター：あーち】の立ち上げに協力してほしい」との要望があったので、発達障害児支援教室「ぽっとらっく」を設立した。幸い、研究期間が終わった後も、神戸市が「ぽっとらっく」、「極低出生体重児の親子教室」運営に関する委託研究費を計上してくれるようになった。平成18年から運営と会計システムをオープンにしようとして松田先生、種村先生、小野玲先生など多くの教員に運営委員会に入ってもらい、「少子高齢社会に適応した街づくり」をテーマに派手さはないものの着実に活動を積み重ねてきた。地域に根を張った活動こそ海外で展開できる事業だとして、インドネシアのガジャマダ大学と連携して地域国際活動も開始した。

地域連携センターの活動には、多くの学生や地域の人々がボランティアとして参加してくれた。活動後の飲み会も楽しみであった。また、何よりも専門の違う先生方との交流は刺激的で総合大学の面白さを満喫できた。農学研究科の内田教授や人文学研究科の奥村教授、そして都市安全研究センターの飯塚教授からはいつも前向きなエネルギーをもらい、海外にもご一緒した。

保健学科は、理系でありながら文系的な特徴も併せ持つ学問分野である。文理融合を目指し、今後も地域での活動を拡げてほしいと思う。和泉センター長、小野副センター長の下での発展を期待している。

保健学研究科の思い出



木戸 良明

前神戸大学医学部保健学科長
前神戸大学大学院保健学研究科長
教授

私は、2008年(平成20年)の10月に、医学研究科から保健学研究科に赴任しましたので、今年で11年になります。准教授で赴任し、2010年に教授になり、2013年(平成25年)からは副研究科長、2016年(平成28年)から3年間、研究科長を務めさせていただきました。准教授で赴任した当初は、医学研究科の喧騒から離れて、静かで落ち着いた日々を送らせていただいております。しかし、その後、役職がつくにつれ、忙しくなっていく、研究科長は、いろいろな意味で思い出深い3年間となりました。まず、最初の洗礼が、部局経費の10%カットです。一気に余裕がなくなり、若手への助成金や各教員への研究経費の削減をせざるを得なくなりました。さらに運営交付金も年々減らされますから、予算のやりくりで苦労しましたし、これから先も大変であろうと思います。それに加え、平成29年度から導入されたポイント制は、教員人事のあり方を大きく変えました。人件費が11%以上削減され(これは教授7人分くらいの削減になります)、後任制が事実上廃止され、人件費をポイント換算して、研究科に与えられたポイント内で自由に教員を選ぶというものです。自由というと聞こえは良いのですが、元々のポイントが少ないので、研究科の教員選考方針が非常に重要になってきました。幸いに、保健学研究科の教員はその点を十分に理解していただいたので、現在も苦しい中ではありますが、将来に向けた人事プランを考えているところです。

これらの国立大学法人を巡る動きは、全国の国立大学を大いに揺るがしており、私たち保健

学研究科も生き残っていくためには、自助努力が必要となってきました。高度専門教育に重点を置いてきた保健学研究科には、大型のお金を取ってこられるシーズはそれほどありません。そこで、将来に向けて育成していくプロジェクトとして、平成28年度の概算に申請した案を改良した「アジア健康科学フロンティアセンター」を部局内センターとして発足し、保健学研究科がこれまで積み上げてきたアジアとの交流を軸にアジアの衛生課題を解決し、将来的にはアジアにおける保健人材育成を目標としております。また、まだ特効薬のない認知症に対して「認知症予防事業」を立ち上げ、現在では「コグニケア」という名称で社会実装・研究・教育を行う全学的組織が保健学研究科を中心に活動しております。将来的には、これらのプロジェクトが保健学研究科の目玉プロジェクトとなることを願っております。

施設面では、保健学科の本丸とも言えるC棟の改修案の施設概算が令和元年度の事業として採択されました。保健学科創基70周年の寄附事業も教員、就進会員、後援会等のご支援があり、目標金額に到達も間近でD201の階段教室の改修が実現できそうです。

以上の様に、これからは、自分たちで発案し、積極的に行動することが、保健学科・保健学研究科の発展に欠かせません。10年後、20年後には飛躍的に発展され、神戸大学をリードし、本部会議も名谷で開催される様な存在になることを祈念いたします。

沿 革

保健学科のこれまでの歩み

- 昭和 24 年 4 月 ▶ 兵庫県立医科大学附属高等看護学院設置
- 昭和 27 年 2 月 ▶ 兵庫県立医科大学附属高等看護学院は、兵庫県立神戸医科大学附属高等看護学院に改称
- 昭和 32 年 4 月 ▶ 兵庫県立高等看護学院設置
- 昭和 34 年 4 月 ▶ 兵庫県立高等看護学院と兵庫県立保健婦専門学院は合併し、兵庫県立厚生女子専門学院に改称
- 昭和 42 年 6 月 ▶ 神戸大学医学部附属看護学校として国立移管(昭和 59 年 4 月廃止)
- 昭和 44 年 4 月 ▶ 神戸大学医学部附属衛生検査技師学校設置(昭和 48 年 3 月廃止)
- 昭和 47 年 4 月 ▶ 神戸大学医学部附属臨床検査技師学校設置(昭和 60 年 4 月廃止)
- 昭和 53 年 8 月 ▶ 校舎を神戸市生田区楠町 7 丁目から神戸市須磨区友が丘 7 丁目に移転
- 昭和 56 年 10 月 ▶ 神戸大学医療技術短期大学部設置(平成 10 年 3 月廃止)
 - ▶ 看護学科(入学定員 80 人)、理学療法学科(入学定員 20 人)、作業療法学科(入学定員 20 人)設置
- 昭和 57 年 4 月 ▶ 看護学科を保健婦助産婦看護婦法に規定する学校として指定
 - ▶ 理学療法学科を理法療法士及び作業療法士法に規定する学校として指定
 - ▶ 作業療法学科を理法療法士及び作業療法士法に規定する学校として指定
 - ▶ 看護学科、理学療法学科、作業療法学科の第 1 回入学式を挙行
- 昭和 57 年 8 月 ▶ 校舎(北棟・講義棟)竣工
- 昭和 58 年 4 月 ▶ 衛生技術学科(入学定員 40 人)設置
 - ▶ 衛生技術学科を臨床検査技師、衛生検査技師に関する法律に規定する学校として指定衛生技術学科の第 1 回入学式を挙行
- 昭和 59 年 3 月 ▶ 校舎(南棟)・福利厚生施設、体育館、課外活動共用施設及び図書館竣工
- 昭和 59 年 11 月 ▶ 屋外リハビリテーション訓練施設竣工
- 平成 6 年 10 月 ▶ 神戸大学医学部保健学科に看護学専攻(入学定員 80 人)、検査技術科学専攻(入学定員 40 人)、理学療法学専攻(入学定員 20 人)、作業療法学専攻(入学定員 20 人)を設置
- 平成 7 年 4 月 ▶ 看護学専攻を保健婦助産婦看護婦法に規定する学校として指定
 - ▶ 理学療法学専攻を理法療法士及び作業療法士法に規定する学校として指定
 - ▶ 作業療法学専攻を理法療法士及び作業療法士法に規定する学校として指定
 - ▶ 第 1 回入学式を挙行
- 平成 10 年 7 月 ▶ 校舎(E 棟・F 棟)竣工
- 平成 11 年 4 月 ▶ 神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻(修士課程)設置
- 平成 13 年 4 月 ▶ 神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻(博士課程)設置〔博士課程前期課程(修士課程)、博士課程後期課程(博士課程)となる〕
- 平成 16 年 4 月 ▶ 国立大学法人法の施行に伴い、設置者が「国」から「国立大学法人神戸大学」となる
- 平成 20 年 4 月 ▶ 大学院保健学研究科保健学専攻設置
- 平成 28 年 4 月 ▶ 助産師・保健師の教育を学部から大学院博士課程前期課程へ移行、助産師コース・保健師コースを保健師助産師看護師法に規定する学校として指定
- 令和 元年 7 月 ▶ 神戸大学医学部保健学科創基 70 周年記念式典・祝賀会を挙行

神戸大学医学部保健学科の創基

昭和24年(1949年)4月 兵庫県立医科大学附属高等看護学院設置

看護学校

- 昭和24年4月 兵庫県立医科大学附属高等看護学院設置
- 昭和27年2月 神戸医科大学附属高等看護学院と名称変更
- 昭和32年4月 兵庫県立高等看護学院設置
- 昭和34年3月 兵庫県立厚生女子専門学院設置
- 昭和42年6月 国立移管に伴い神戸大学医学部附属看護学校設置
- 昭和59年3月 医療技術短期大学の開設に伴い閉校



看護学校校舎



昭和50年当時の楠キャンパス



技師学校校舎

衛生(臨床)検査技師学校

- 昭和44年4月 神戸大学医学部附属衛生検査技師学校設置
- 昭和47年4月 神戸大学医学部附属臨床検査技師学校開設
- 昭和60年3月 医療技術短期大学の開設に伴い閉校

看護学校

昭和24年4月 兵庫県立医科大学附属高等看護学院設置

- 昭和24年4月 兵庫県立医科大学附属高等看護学院設置
- 昭和27年2月 神戸医科大学附属高等看護学院と名称変更
- 昭和32年4月 兵庫県立高等看護学院設置
- 昭和34年3月 兵庫県立厚生女子専門学校設置
- 昭和42年6月 国立移管に伴い神戸大学医学部附属看護学校設置
- 昭和59年3月 医療技術短期大学部の開設に伴い閉校



学校祭での演劇 (昭和40年頃)



研修旅行で関東方面へ (昭和43年5月)



卒業式 (昭和40年頃)



看護学校最後の卒業式 (昭和59年3月)



戴帽式後学生寮中庭にて (昭和41年10月)



看護学校正面玄関にて (昭和41年)



学校祭での仮装



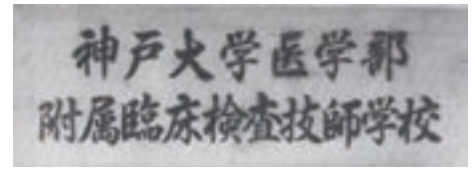
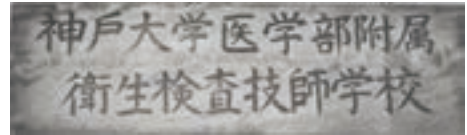
看護学校最終学年後方のバスは楠キャンパスへの送迎用 (昭和57年)

衛生(臨床)検査技師学校

昭和44年4月 神戸大学医学部附属衛生検査技師学校設置

昭和47年4月 神戸大学医学部附属臨床検査技師学校開設

昭和60年3月 医療技術短期大学部の開設に伴い閉校



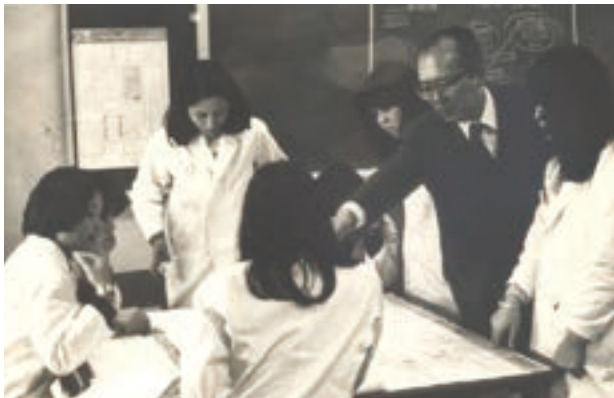
当時、校舎の入り口に掲げられていた手書きの看板



衛生検査技師学校1期生入学式(初代校長馬場茂明の挨拶)(昭和44年)



臨床検査技師学校3期生入学式(昭和49年)



授業風景(昭和48年)



臨地実習
臨地実習は楠キャンパスの附属病院で1年間行われた。
(昭和50年頃)



新入生歓迎会(昭和49年)



クリスマス会(昭和55年)



卒業式(昭和57年)

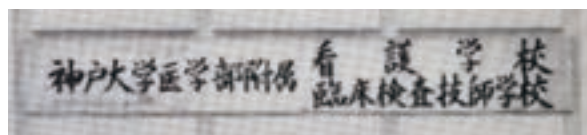


閉校時に作成された記念誌「授人以漁」の題字は初代校長馬場茂明による(昭和60年)

名谷キャンパスへの移転

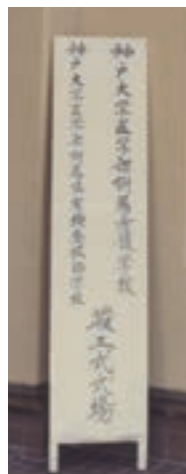
昭和53年(1978年)10月

看護学校と臨床検査技師学校は楠地区から現在の名谷地区に移転、1つの校舎で授業を受けるようになった。移転当時、校舎の周りはほとんど建物がなく、市営地下鉄の名谷駅まで見渡せるほどであった

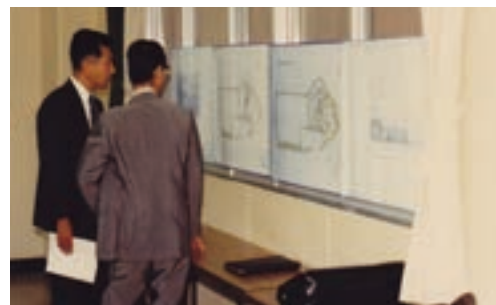


移転当時の校舎(現在のB棟)

校舎の前に見えるバスは臨地実習などで楠キャンパスに通うための専用バス(昭和55年)



看護学校・臨床検査技師学校 名谷校舎竣工式(昭和53年9月7日)



名谷地区移転に伴う開講式(昭和53年10月)



看護学校最終学年後方のバスは楠キャンパスへの送迎用(昭和57年)

医療技術短期大学部としての歩み

昭和56年10月 神戸大学医療技術短期大学部設置(平成10年3月廃止)

看護学科(入学定員80人)、理学療法学科(入学定員20人)、作業療法学科(入学定員20人)設置

医療技術短期大学部の第1回入学式(昭和57年4月)から第3回入学式(昭和59年4月)は中棟大講義室(現D201教室)で挙行



昭和60年度・平成5年度
神戸大学医療技術短期大学部入学式



第4回(昭和60年4月)からは当時新築の体育館で



第10期生入学式(平成3年4月)



入学式後のオリエンテーション(昭和61年4月)



新入生歓迎コンパ(昭和61年4月)

医療技術短期大学部としての歩み 新生一泊合同研修 多職種協働教育の原点

前期講義が終了するとすぐに一泊合同研修
これからの医療従事者のあるべき姿や、現在の医療の問題点をテーマに
4専攻学生と教員の小グループで討議 学生と教員は全員参加



1日の午後 オリエンテーションスポーツ大会



夕食後 グループ座談会

2日は朝のマラソンから始まり、朝食後には講演会

於 社ボートセンター (昭和59年～平成4年)

医療技術短期大学部としての歩み 授業

医療短大は教養(教養原論)科目、体育科目、専門科目をすべて名谷校舎で展開。
そのため神戸大学の他学科にはない専用のグラウンドや体育館などを有していた。



作業療法学科 金子翼先生講義(昭和63年)



衛生技術学科 磯部敬先生講義(平成4年)



理学療法学科 武富由雄先生講義(平成7年)



ザ・座談会(前田先生、野崎先生、木村先生 平成7年)



上羽康之先生 退官講義(平成5年)



看護学科 前田和美先生講義(平成5年)

医療技術短期大学部としての歩み 戴帽式

看護学科では3年次の臨床実習前(5月)に戴帽式を挙げていた



第3回戴帽式(昭和61年)



第13回戴帽式で祝辞を述べられる野崎先生(平成8年)



第8回戴帽式を終えて 決意をあらたに(平成3年)



第12回戴帽式で西塚学長から寄贈された名画のレプリカ(附属図書館名谷分室に展示)(平成7年)

医療技術短期大学部としての歩み 学内実習

看護学科



当時は患者体験を通じた
学内実習を多く展開



医療技術短期大学部としての歩み
学内実習

衛生技術学科



医療技術短期大学部としての歩み
校内実習

理学療法学科



医療技術短期大学部としての歩み
学内実習

作業療法学科



保健学科の誕生

平成 6年10月設置

開学記念式典および祝賀会

平成6年(1994年) 11月1日

保健学科設置記念式典

(於：新神戸オリエンタルホテル)



平成7年度 後期日程試験場(神戸大学)



岡山大学での試験会場



大阪大学での試験会場



翌平成7年4月に第1期生の入学式

平成7年度(1995年)の入学試験は1月17日に発生した阪神淡路大震災のために名谷キャンパスでの実施が不可能になった。そのため、保健学科1期生の入学試験は大阪大学と岡山大学に試験場を借りて実施された。

保健学科の誕生 教育研究環境の整備



新校舎竣工(平成10年7月)



解剖学見学実習 2年次後期に全専攻で展開



保健学科としての歩み

看護学専攻

平成24年度(2012年)から取得可能な
資格を看護師国家試験資格に特化

複雑化・多様化する保健医療福祉に対応可能な
看護学基礎教育の充実



平成28年度(2016年)4月

助産師・保健師の教育を学部から
大学院博士課程前期課程へ移行



平成25年度(2013年)からは国際分野の実習選択が開始

保健学科としての歩み

検査技術科学専攻



化学実験



臨床化学実習



血液学実習



細菌検査学実習



病理学講義



病理組織細胞学実習



保健学科としての歩み

理学療法学専攻



日常生活動作実習



義肢装具学実習



疾患別理学療法学実習



生活環境学実習



保健学科としての歩み

作業療法学専攻



基礎作業療法学実習



実習前臨床能力試験



身体障害生活技術論実習



卒業研究発表会



「作業療法フィールド実習」



オーストリア共和国 FHヨアネウム応用科学大学とタイ王国 チェンマイ大学の作業療法コースとの「Exchange program」

保健学科としての歩み

平成7年～



災害と保健学科 阪神淡路大震災と保健学科

当時の教職員は大学の仕事のかたわら、医療活動や復旧活動のボランティアに加わった。また、被災者の心身のケアを目的とした活動や研究をその後も継続して行った。



倒壊した高速道路 (神戸大学震災文庫より)



神戸大学医学部仮設診療所



地震により被害を受けた保健学科実験室内部



仮設診療所内部



ヘリコプターで運ばれる救援物資 (神戸大学震災文庫より)



『Supporting Families with Small Children in Disaster Situations』
 本学教員の編集による英語の震災時
 ハンドブック。中国語にも翻訳
 (平成11年)



避難所での巡回診療ボランティア

災害と保健学科 被災地への援助活動

保健学科では自らの被災体験をもとに災害医療に関する活動を展開。カリキュラムに災害保健の講義や演習を取り入れるとともに、国内外の被災地への救援活動にも積極的に取り組んでいる。

スマトラ沖大地震

平成17年(2005年)3月29日、スマトラ沖で発生したM8.6の大地震の津波でインドネシア・スマトラ島でも大きな被害を受けた。神戸大学ではいち早く救援隊を組織し、現地に向かった。保健学科からも医師、看護師などの教員がスマトラ島・バンダアチェでの復旧活動に参加した。



避難テント



救護所



豊岡水害の復旧活動

平成16年(2004年)10月20日、台風23号が兵庫県を襲った。保健学科からも復旧活動のための医療班に多くの教員が参加した。



診療施設



被害状況



救護活動

地域連携センター

就学前の発達障がい児とその家族に対する支援事業



地域高齢者・認知症の方とご家族への支援事業



医療と福祉の連携による障がい者への生活支援事業



須磨地域在住高齢者との関わり

多職種協働教育IPE (Interprofessional Education)の取組み

保健学科では現代の医療問題に対応できるチーム医療を念頭におき、保健学科と医学科の学生を対象とする新たな「多職種」「医療人」「協働」、いわゆる「IPW: Interprofessional Work」のカリキュラムを取り入れてきた。平成19年（2007年）には文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)に本学の「協働の知を創造する体系的IPW教育の展開」が採択され、IPW教育(IPE)の新たな取組みを展開



IPW 関連授業

- 1 年次 IPW 概論
 - 現代医療と生命倫理
 - 初期体験実習
- 2 年次 国際・災害保健
- 3 年次 国際・災害保健活動論
- 4 年次 IPW 演習



セミナー「Students as Change Agents for Interprofessional Working」

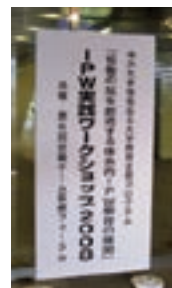
カナダのIPW学生組織の代表によるセミナー体験型ワークショップ



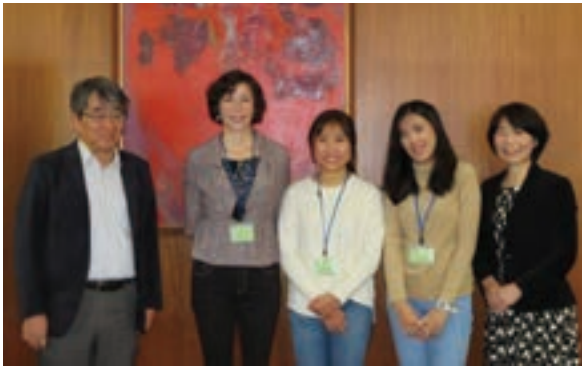
初期体験実習に向けてのグループ討論と実習後の発表会。平成19年からは神戸薬科大学の学生も一部参加

IPW ワークショップ

特色GP成果を共有するために学内外の教職員、医療関係者を対象にワークショップを開催(2007、2008年)



環太平洋諸国との連携による 次世代グローバルヘルスリーダー育成プログラム



タイ国チェンマイ大学看護学部3年生の参加 (2018年)



派遣学生(学部・大学院)の成果報告会

<2017年 派遣先>

タイ・チェンマイ大学

オーストリア・FHヨアネウム応用科学大学

インドネシア・ガジヤマダ大学

(ダブルディグリー・プログラム締結)

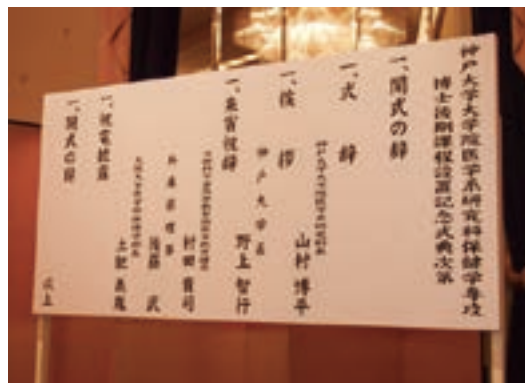
アイルランガ大学

大学院医学系研究科保健学専攻から 大学院保健学研究科保健学専攻へ

医学系研究科保健学専攻の設置

平成11年(1999年)4月に大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程(2年:入学定員56名)が設置。

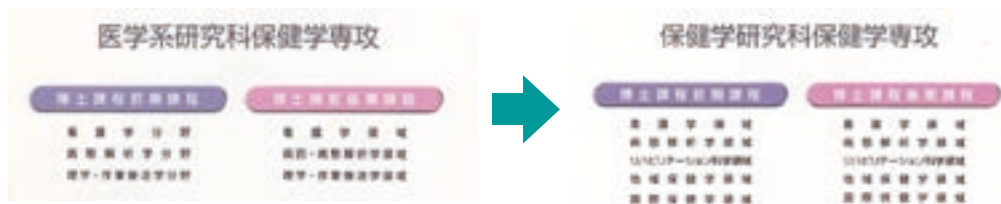
平成13年(2001年)4月には博士後期課程(3年:入学定員25名)が設置。



保健学研究科保健学専攻への改組

平成20年(2008年)4月 医学系研究科保健学専攻は大学院保健学研究科保健学専攻へと改組
(博士前期課程2年入学定員56名、博士後期課程3年入学定員25名)

研究科を看護学、病態解析学、リハビリテーション科学、地域保健学、国際保健学の5領域とし、統合保健医療を担う人材の育成を行うのに適した領域・分野を超えた学際的なアプローチが可能な研究体制を整備した。



看護学領域
看護学領域ではCNSコース
(家族支援CNS課程)を
新たに設けた。



病態解析学領域



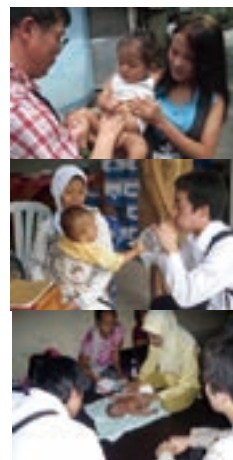
リハビリテーション科学領域



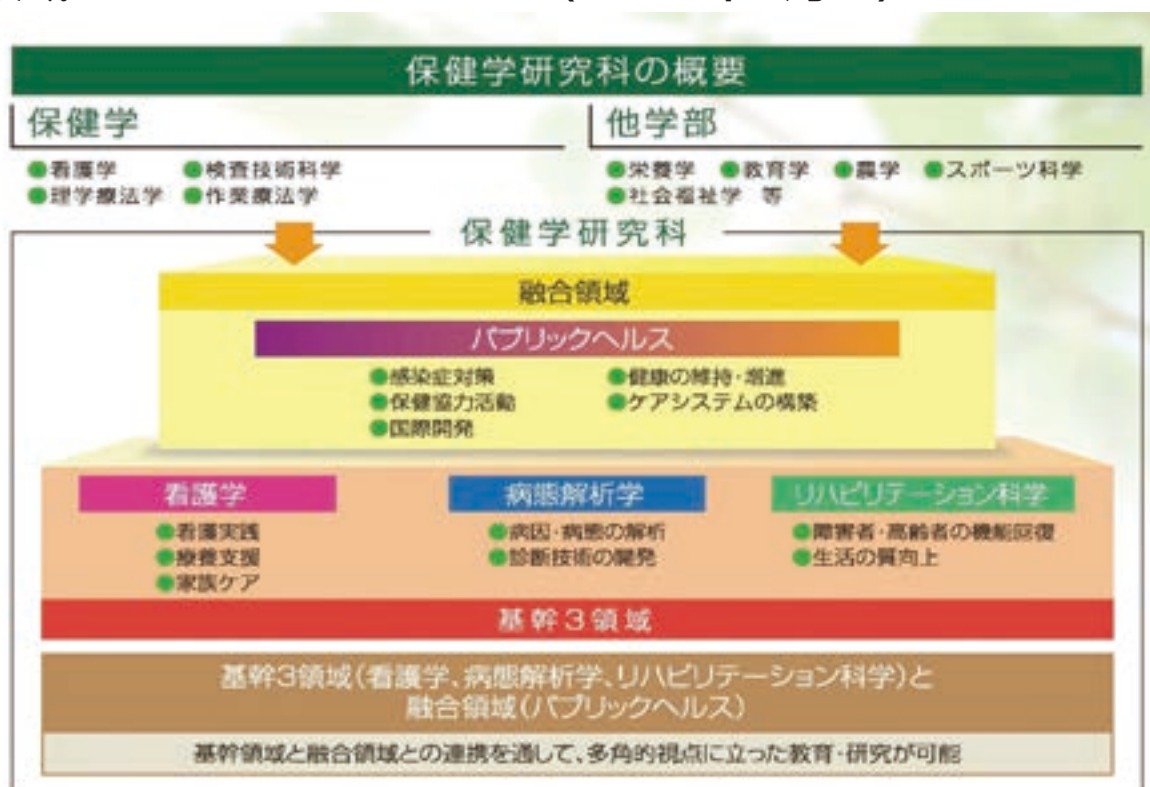
地域保健学領域



国際保健学領域



融合2領域(国際保健学・地域保健学)から 融合領域 パブリックヘルスへ(2018年4月～)



保健学研究科としての歩み 看護学領域



大学院講義風景



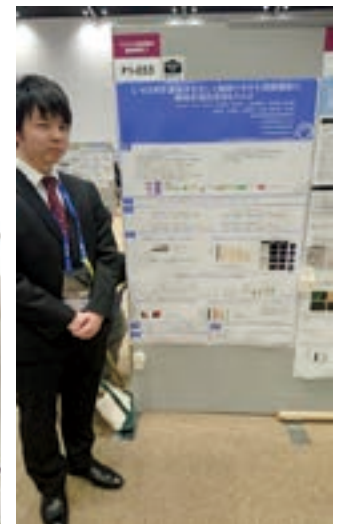
国際学会発表



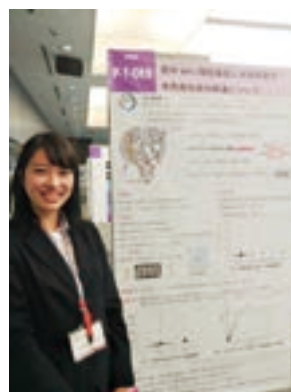
保健学研究科としての歩み 病態解析学領域



2013年研究科忘年会（病態解析学領域メンバー）



2018年度学位授与式



学会発表

保健学研究科としての歩み

リハビリテーション科学領域



ホームカミングデイ (リハ科学領域担当)



ユネスコチェア国際ワークショップ



石川 齊教授



三木 明德教授



リハ科学領域歓迎会



ゼミの一コマ

保健学研究科としての歩み

パブリックヘルス領域



インドネシア日本タイ感染症フォーラム



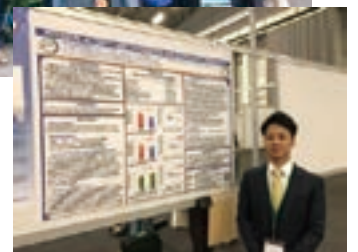
学会参加
学会発表



マヒドン大学との交流



兵庫医療大学との合同ゼミ合宿



保健学研究科としての歩み **保健師コース**



保健師コース 2年生：
公衆衛生看護学実習Ⅰ（行政）



保健師コース 1年生：健康教育演習



タイ国のヘルスケアシステムに関する勉強会



インドネシア国立ガジャマダ大学での地域フィールドワーク演習



ガジャマダ大学での研究発表

保健学研究科としての歩み **助産師コース**



ハイリスク母性ケア論特講の演習風景



助産師コース
1年生の新生児蘇生訓練



特別講演
フランスにおける助産師活動



周産期安全安心研究会に
イエール大学大学院助産コースの大学院生が参加



分娩介助練習



助産管理学：神戸大学経営学部の教授が、
一部講義を担当する全国初の試み



産科救急演習



保健学科及び保健学研究科の現在

【入学定員】

■ 保健学科(学部)

専攻	入学定員	募集人員			
		前期日程	後期日程	社会人特別入試	「志」特別入試
看護学	80	70	6	若干名	4
検査技術科学	40	28	10	若干名	2
理学療法学	20	15	3	若干名	2
作業療法学	20	15	3	若干名	2

■ 保健学研究科(大学院)

保健学専攻	募集人員	備考
博士前期課程	64	保健師コース及び助産師コース, 社会人特別入試, 外国人特別入試による若干人を含む
博士後期課程	25	神戸大学大学院からの進学者, 社会人特別入試及び外国人特別入試による若干人を含む

【学部生 卒業生進路状況】

■ 平成26年度

()内は9月末卒業生人数で内数

専攻	卒業生数	就職者数	就職			進学者数	その他
			病院	公的機関	民間		
看護学	76	67	62	3	2	9	0
検査技術科学	42	13	12	0	1	28	1
理学療法学	18	9	6	2	1	9	0
作業療法学	19	18	17	1	0	1	0

■ 平成27年度

専攻	卒業生数	就職者数	就職			進学者数	その他
			病院	公的機関	民間		
看護学	85 (4)	64	54	9	1	18	4
検査技術科学	39	15	9	2	4	23	1
理学療法学	17	9	8	0	1	8	1
作業療法学	15	15	14	1	0	0	0

※就職かつ進学…看護 1、理学 1

■ 平成28年度

専攻	卒業生数	就職者数	就職			進学者数	その他
			病院	公的機関	民間		
看護学	75 (1)	58	52	5	1	14	3
検査技術科学	38	14	10	1	3	24	0
理学療法学	21	11	5	5	1	11	0
作業療法学	22	17	15	0	2	5	0

※就職かつ進学…理学 1

■平成29年度

専攻	卒業生数	就職者数	就職			進学者数	その他
			病院	公的機関	民間		
看護学	56	47	42	2	3	10	0
検査技術科学	43	23	12	6	5	17	3
理学療法学	21	13	9	1	3	6	2
作業療法学	14	13	10	2	1	1	0

※就職かつ進学…看護 1

■平成30年度

専攻	卒業生数	就職者数	就職			進学者数	その他
			病院	公的機関	民間		
看護学	86 (1)	61	49	5	7	21	4
検査技術科学	40	15	7	2	6	23	2
理学療法学	23	8	4	1	3	13	2
作業療法学	14	12	11	0	1	2	0

【修了者 卒業生進路状況】

■保健学(修士)

	卒業生数	就職者数	就職				進学者数	未定・その他
			病院	公的機関	民間	研究機関		
平成 26 年度	51	46	50	4	12	3	16	2
平成 27 年度	65	57	34	1	18	4	15	4
平成 28 年度	66	55	27	10	14	4	12	7
平成 29 年度	59	50	24	11	13	2	11	5
平成 30 年度	55	51	25	6	20	0	6	2

■保健学(博士)

	卒業生数	就職者数	就職				未定・その他
			病院	公的機関	民間	研究機関	
平成 26 年度	18	13	3	1	0	9	5
平成 27 年度	16	16	4	0	0	12	0
平成 28 年度	16	11	4	0	2	5	5
平成 29 年度	12	10	4	0	0	6	2
平成 30 年度	23	16	7	1	2	6	7

【国家試験合格率】

	看護師			保健師			助産師		
	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
平成26年度	82	81	98.8%	81	75	92.6%	5	5	100.0%
平成27年度	76	76	100.0%	76	72	94.7%	5	5	100.0%
平成28年度	76	76	100.0%	3	2	66.7%			
平成29年度	56	56	100.0%	6	6	100.0%	4	4	100.0%
平成30年度	85	81	95.3%	5	5	100.0%	3	3	100.0%

平成29年度より、保健師・助産師教育は学部より博士前期課程へ移行

	臨床検査技師			理学療法士			作業療法士		
	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
平成26年度	44	39	88.6%	17	16	94.1%	19	19	100.0%
平成27年度	44	40	90.9%	19	19	100.0%	19	18	94.7%
平成28年度	43	38	88.4%	25	25	100.0%	21	20	95.2%
平成29年度	45	37	82.2%	21	19	90.5%	14	14	100.0%
平成30年度	44	27	61.4%	24	23	95.8%	14	14	100.0%

【留学生数】

■ 博士前期課程

年度	看護学		病態解析学		リハビリテーション		地域保健学		国際保健学	
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費
平成26年度										
平成27年度		2			1					
平成28年度		2			1					
平成29年度					1					
年度	看護学		病態解析学		リハビリテーション		パブリックヘルス			
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費
平成30年度		4			2	1		3		

2018年度より、地域保健学領域と国際保健学領域が統合され、パブリックヘルス領域となった。

■ 博士後期課程

年度	看護学		病態解析学		リハビリテーション		地域保健学		国際保健学	
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費
平成26年度					1			1		1
平成27年度										1
平成28年度		1								1
平成29年度		1		1						1
年度	看護学		病態解析学		リハビリテーション		パブリックヘルス			
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費
平成30年度		1		1		1				

2018年度より、地域保健学領域と国際保健学領域が統合され、パブリックヘルス領域となった。

編集後記

令和元年に、神戸大学医学部保健学科創基 70 周年を迎えることができました。ここより、感謝申し上げます。この節目に、70 年の歩みをつづった「保健学科創基 70 周年記念誌」を刊行する運びとなりました。

本記念誌では、保健学科の歩みをご紹介し、これまでの保健学研究科長の諸先生より思い出の文章をいただきました。また、7 月 9 日に挙行されました保健学科創基 70 周年記念式典および祝賀会でのご挨拶と写真を掲載しています。さらに、記念式典および祝賀会の様子を収めた、DVD を作成いたしました。

本誌刊行に際しましては、記念誌編集委員会を立ち上げ、内容の検討や写真の収集や編集などを行ってきました。お忙しい中、寄稿いただいた諸先生、資料や写真を提供していただいた教職員の皆様、さらに編集作業に多くの時間を割いていただきました編集委員の方々、そして会計係の中江さんに深謝いたします。

本記念誌が、本学の歩みと現在の姿、加えて未来への展望に繋がるものとなりましたら、幸甚に存じます。(石川朗記)

記念誌編集委員会
委員長 石川 朗

医学部保健学科創基70周年記念

実行委員会

募金委員会

委員長 宮脇 郁子

委員 齋藤いずみ 長谷川菜摘 靱 千恵 秋末 敏宏

小野 玲 長尾 徹 内田 智子

記念式典実行委員会

委員長 森山 英樹

委員 築田 誠 正垣 淳子 重村 克巳 入子 英幸

井澤 和大 四本かやの 内田 智子

記念誌編集委員会

委員長 石川 朗

委員 岩崎 三佳 廣田 美里 大崎 博之 三好 真琴

荒川 高光 野田 和恵 篠川 裕子

発行日	令和元年 11 月吉日
編集	神戸大学医学部保健学科創基70周年記念誌編集委員会
発行	神戸大学大学院保健学研究科 〒 654-0142 神戸市須磨区友が丘 7 丁目 10-2 078-796-4503
印刷	株式会社ルネック 〒 652-0047 神戸市兵庫区下沢通 4-7-30 078-576-8866

70th

神戸大学医学部
保健学科創基70周年